

東北手話の特徴に関する一考察

発表者：標準手話研究部東北班

1. 研究者：加藤 薫（班長：秋田県） 菅原伸哉（班員：宮城県）
 浅利義弘（事務局：青森県） 斎藤千英（班員：福島県）
 小野善邦（班員：山形県） 山中沙織（班員：福島県）
 高橋幸子（班員：岩手県）

2. 今回のテーマとねらい

- ・2014年度第14回手話研究セミナーで東北班は「新しい手話の普及度調査」の研究し発表した。内容は①新しい手話がどの程まで理解され、普及されてきたか6県ごとに調査。②新しい手話がどのように普及され、また新しい手話を普及していくためにはどうしたらいいか研究、その課題を考える、というもの。
「新しい手話Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」～新しい手話2013までの中から100語を抽出し、東北6県のろう者、手話通訳者に認知度や普及度を調査した。その結果、普及度が高い手話、普及度が低い手話が分かり、新しい手話がろうあ者や手話通訳者などに正しく理解され、普及されていくための運動課題がわかった。東北班は班ができて2年目で経験不足だったが、本部からの助言もあり発表に間に合った。初めての調査研究でセミナーでは、緊張しながら発表したことが思い出される。
- ・今回は、東北には地域なりにきこえない人の生活文化、受けた教育、スポーツ活動等があり、そこから生み出された手話がある。
手話が言語として認められないことや口話教育での手話の禁止や蔑視。きこえる社会の中で様々な差別や偏見を受けながら、先輩から後輩へと受け継がれてきた手話の歴史はかけがえのない無形文化財になりえるものでもある。
- ・近年、古くから受け継がれてきた伝統手話が全国各地で次第に無くなりつつある。このことで今回、東北特有の風土や地理的条件、生活の中から生み出された手話を地域（東北6県）ごとに抽出し、分析、考察を行うことで東北手話言語の魅力を改めて確認し、保存に向けた取り組みを考えるものとしてこの研究を実施した。

3. 手話抽出のポイント

- ・7名の班員が、これまで使用されてきた手話や地域で使われていた手話の中から、それぞれの条件を考え、ポイントを整理してみた。
- ①東北の地理的条件…東北の地形、人の流れ（交通、交流）による手話の条件
- ②東北の気候や風土条件…東北の四季、気候等における手話の条件
- ③学校教育の条件…聾学校での手話の獲得や使用の条件
- ④運動指導者が与えた影響…指導者の講話（口話、手話）が東北のろうあ者に影響。
- ⑤その他…人物（東北に手話を使う人がいること…一人では手話は成り立たない）

4. 収集と選択

- ①各県の班員が「3. 手話抽出のポイント」に沿って特徴ある手話を収集。
- ②その中から10単語ほど選択。(他県と同じものはカット。)
- ③さらに特徴ある3単語を動画に収録
- ④選択した手話についての考察
- ⑤研究発表する論文と動画データの作成

5. 県別の特徴ある手話と活用例

青森県…①あぶない。

例文…車が自分近くに通る「あぶない」。

②見落とし。

例文…残っていたものを「見落とした」。

③上品・高級。

例文…わお～「高級」車だ。

秋田県…①まぐれ

例文…試験に合格した、「まぐれだ！」

②間違った

例文…(新札の千円を)1万円札と思ったら「間違った！」

③がんぜない(子供っぽい)

例文…大人のくせに寝小便、「がんぜない」

岩手県…①危ない。

例文…車やバイクが近くを走って「危ない」

②痛い。

例文…お腹が「痛い」

③ぎりぎり(迫っている)

例文…時間が「ぎりぎり」

山形県…①わからない

例文…パソコンの使い方が「わからない」

②どうして・なぜ?

例文…色々服を買うのは「どうしてか」

③でたらめ

例文…本の文章は「でたらめだ」

宮城県…①体育館。

例文…遊び、「体育館」に行こう。

②指導

例文…生徒を「指導」。

③準備

例文…ご飯の「準備」。

福島県…①合わない（似合わない）。

例文…服の色合いが「合わない」。

②食いしん坊（食べ・飲み放題）。

例文…すごく食べるね「食いしん坊！」

③鋭い。

例文…え、見つけたの?! 「鋭い」

6. 収集した手話から考察したこと

①青森手話の特徴

- ・青森の手話は、標準手話言語と比べて津軽手話、南部手話があり、単語と一文が短いのが特徴。その理由として、厳しい冬の季節に指を隠す手袋（5本指の手袋は当時はなかった）のままでは伝わらず、顔の表情で伝えるものが多々あった。
- ・県内のろう学校も青森市、弘前市、八戸市と三校あり、卒業後も三団体に分かれて活動し東北ろうあ連盟に加入していた。お互いに対立していた時期があり、手話も対立の地域に悟られないよう、津軽手話、南部手話をそれぞれ使い続けていた。

②秋田手話の特徴

- ・ろう学校が秋田市に一校ある。きこえない子どもに無理やり日本語を習得させるために手まね（手話）の使用を禁じ、使った者には棒でたたかなど厳しい教育が行われた。それでも「ろう」として生き続けなければならない子どもたちは、先生に見つからぬようコソコソと使わなければならなかった。手まね表出も目立たないように小さい動作で、顔（表情）を中心に指だけの動作で通じる手まねを使った。
- ・ある時、先生が板書している間（生徒に背を向けている間）生徒が一斉に手まねでおしゃべりした。しかし、そのことが先生にバレて棒でたたかれ叱られた。先生の頭の後ろに目が付いている訳ではなく、学生服の袖について2つのボタンが手まねを使えば鈴のように鳴って聞えたからだと分かり、なおさら小さくコソコソと使ったというエピソードもある。

③岩手手話の特徴

- ・岩手県は、北海道に次いで全国2番目に広い土地を持ち、人の住む平地の多くは奥羽山脈と北上山地に挟まれ人と人の交流を狭めている。ろうあ者の交流も同様に狭く、その土地ならでの手指を動かさなくても顔の表情だけでも通じる手話があった。（語源を探求したが根拠となるものが見つからなかった）

- ・昭和41年、奥羽山脈を貫く田沢湖線（大曲⇄盛岡間）が開通し、2、3年後に秋田のろうあ者との交流が始まり、お互いの手話の違いに驚いた時代もあった。

④山形手話の特徴

- ・ろう学校では、厳しい口話教育の中で口話のできる生徒は先生に褒められ優遇されがちであった。話せない生徒は、先生に分からないように口元中心の手まねや表情で伝え合うようになった。口話のできた生徒も次第にその手まねにめり込み、手話でコミュニケーションが取れるようになった。
- ・1940年代に東北各県にろうあ協会設立を呼び掛けて廻った藤本敏文氏や三浦浩氏等の話に、様々な手話があることや堂々と手話を使う様に目覚めさせられ、それをきっかけに山形手話が発達・普及したと思われる。

⑤宮城手話の特徴

- ・県内に北には小牛田校、中央に宮城（仙台）校のろう学校があり、小牛田校はきこえる先生だけでの口話での授業だったが、熱心でなかったように思われる。そのため、ことばが分からない生徒が多く物の形を手で表して伝えるようになった。（例文の「体育館」は校章が体育館にあったことで、校章＝体育館）。
- ・仙台校はろうの先生がおり、口話教育の中でも手話を使った授業が行われ、そこから手話が普及していったと思われる。宮城県の手話は、動作が大きいのが特徴のように思う。

⑥福島手話の特徴

- ・比較的動きが大きくスピードがあり、片手でも通じる「そこまでやる？」の表現や表情と共に口形が付いているのが多くある。
- ・上記のことから、福島県は全国で3番目に広い面積を持つ県でろう学校は1ヶ所。会津地域は新潟、いわき地域は茨城、相馬地域は宮城の高等部及び専攻科に行き、手話も様々で、大きく且つ口形を付けることで一つになったと思われる。

⑦東北全体の手話視点として

- ・東北6県は南北に広い面積を持ち、中央に奥羽山脈の険しい山並みが日本海側に雪を降らせ、人と人との往来を遮断し交流を狭めてきた。そのことで人々の生活習慣や言語などの文化、産業や経済などへの影響も大きかったと思われる。ろうあ者への影響も大きく、他地域との交流がなければその地域の狭い社会だけの手話が残され、それがそのまま受け継がれてきたと思われる。また比較的広い面積を持つ県では、ろう学校は近い所を選ぶ傾向があり、隣県のろう学校に入学した生徒は、隣県に影響を受けて自県の手話と融合された手話ができたとと思われる。
- ・東北は、一年を通じて四季の移り変わりがはっきりしている反面、寒暖の差が激しい。夏は「暑さ」や「やませ」に凍え、10月末から翌年の3月まで雪に閉ざされ、幾日も氷点下で暮らさなければならない厳しさがある。氷点下での生活はきこえる人でさえ言語活動も十分に行えず、出来るだけ短時間で通じることばが生み出された。「け」（来い）「く」（食べる）「しえ」（しなさい）等、一語だけで方言が多々ある。手話も同様、寒さの中で凍える顔や手を一瞬の間の表情や手指で伝えなければならない手話が創造されたと思われる。

7. 研究の結果（まとめ）として

- ・秋田の手話の特徴については、手話・言語・コミュニケーション誌No.8「秋田手話の歴史・試（私）論」を執筆した際、多くの秋田手話から学ぶいい機会を得た。今回こうしたことが大いに役立ち、研究発表に取り入れられたことは喜ばしいこと。今後も秋田手話の研究に保存に取り組んでいきたい。（加藤）
- ・今回の研究は、宮城県の班員の交代時期にあり十分な引継ぎが出来なく、また個人の事情などがあったために東北班には迷惑をかけた。班員の様々なサポートで宮城手話の研究発表が出来たことは良かったと思う。（菅原）
- ・今回、同単語で表現が同じものを除いてきたが、似た手話がいくつかあった。これは隣県との交流で、少しずつ変化していったものと思われる。手話は「視ることば」と言われるように、表現だけでなく、手話の成り立ちの段階でそのものの形や状況が、手の形、動き、位置になっていることがわかった。講習会やサークルで教えていない手話「ろう語」少しずつ集めているが、ほとんどの語源がわからず。年配の方に聞いても「先輩が使っているのを見て…」と。今後手話の保存及び分析していきたいと考えています。（山中・斎藤）
- ・厳しい風土で作られた「顔」中心の青森手話に感銘を受けた。もっと青森手話を分析していけば、表情と手話表現の動作のルーツや年代や地域ごとに探ることが出来ると思う。それを今後、研究課題としていきたい。（浅利）
- ・山形手話の特徴を探ることで、山形手話の生い立ちや普及の仕方を学ぶことが出来た。その土地に生きてきたろう者の手話を尊重しつつ、新たに創作され増えていく標準手話に埋もれないよう保存していかなければならないと思う。（小野）
- ・私はろう学校卒業後就職して、当時の婦人部長と親しくなり当時の手話をたくさん教えていただいた。手話は人を育てる魅力もあると思う。今回の岩手手話の特徴を探る中で、当時の手話に懐かしいものを感じると同時に今後も大事にして使い続けていけるようにしていきたい。（高橋）

《参考文献》

- ・手話・言語・コミュニケーションNo.8「秋田手話の歴史、試（私）論」
- ・手話・言語・コミュニケーションNo.8「山形手話の歴史」
- ・山形県ローア協会創立50年記念誌
- ・ろうあ者の歩み「青森県の40年」記念誌
- ・岩手県ろうあ協会70年記念誌
- ・岩手県トリセツ（昭文社発行）
- ・宮城県小牛田聾学校創立20周年記念写真
- ・福島県ろうあ運動ニュース500号記念誌 など。

(2025.1.14 touhokuhan)